

「世界気候会議」に出席して

福 井 捷 朗

1979年2月、スイスのジュネーブで世界気候会議が開かれた。近年、日本でも異常気象であるとか、氷河期の再来などという話を耳にする。この会議は、そのような地球規模での気候変動を主題とするものである。この会議は世界気象機構(WMO)が、他の関連国連機関(FAO, WHO, UNESCO, UNEP)の協力を得て開いたものである。会議には約400人が参加し、期間は2週間であった。京都大学東南アジア研究センターからは市村真一前所長も参加され、分科会の議長を務められた。この会議の意味を振り返ってみよう。

未来の気候については諸説がある。ある者はかなりセンセーショナルに寒冷化を、他の者は、逆に温暖化を主張する。非専門家の目には混んとしてしか映らない。専門家たちの統一見解が待たれるわけだが、この会議はある程度この要望を満たしたと思う。その内容をかいつまんでいえば次の通りである。

自然的要因による気候変動が過去にあったこと、現在もその過程にあること、将来も続くことは確実である。ここ数10年間に北半球の一部でみられた寒冷化傾向もその一例である。しかし、自然的気候変動に関する今日の科学の水準は極めて低いので、この現象の将来予測はできない。一方、人為的な気候変動の可能性はある。化石燃料の消費と土地利用の変化によって、ここ1世紀の間に大気中の炭酸ガスは15パーセント増加し、今日では年率約0.4パーセントで増加を続けている。炭酸ガス濃度は気候を決定する重要な因子の一つである。この炭酸ガス濃度増加の影響は不明な点も多いが、高緯度地方の地表温度の上昇をもたらすかもしれない。いずれにせよ、炭酸ガス増加の効果は、今世紀末までには検出可能な程度にまで大きくなり、21世紀中葉



世界気候会議の討論に参加した福井
助教授。左側(写真はNHK提供)

には顕著なものになる可能性がある。

以上がこの会議に集まった各国の気象専門家たちの一応の了解であった。その内容について非専門家である私がとやかくいうことはできない。ただ、広い範囲の気象専門家たちがグループとしてこの問題に発言をしたおそらく最初のものとして意義があると思う。

この会議のもう一つの意義は、気候変動そのものだけでなく、その人間社会に及ぼす影響をも論議の対象としたことにある。したがって、気象、気候専門家以外に、極めて広い範囲からの専門家の参加を必要とした。WMOが従来、守備範囲としていた領域を越えることが必要となった。このように広範囲からの専門家の参加を得たことの意味は多々あろう。そのうちでもとくに重要なことは、気候変動の影響は気候変動そのものの大きさのみによって決まるものではなく、人間社会の気候変動に対する感受性の大きさの時間的、歴史的変化が等しく重要であるという指摘であった。このこと自体はごく当たり前のことかもしれない。しかし、気象専門家だけからなる会議では、おそらく強調されない点であろう。

(京都大学東南アジア研究センター助教授)